

II-478

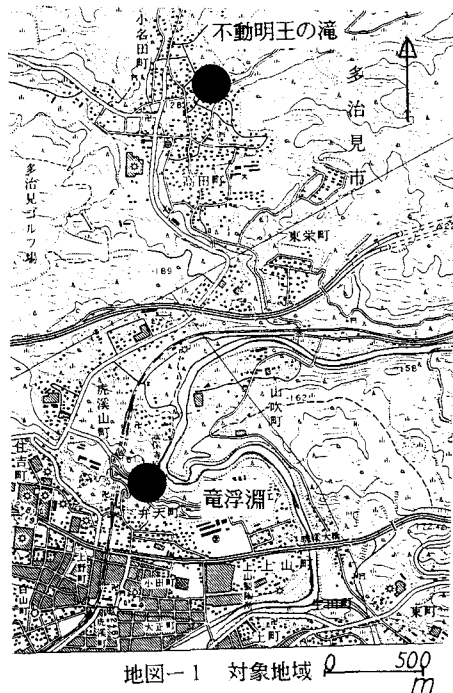
「性悪女」的水辺に、昔話が与える影響

豊橋技術科学大学 正 平松登志樹

1. はじめに

マーフィーの法則によれば、母なる自然は性悪女¹だ(Mother nature is a bitch)そうだ。水辺も、母なる自然を感じさせる。「のぞいてみたい、さわりたい、犯したい衝動にかられることもある。しかし、実際近づくことさえこわい。深入りすると痛いめにあいそうだ。」のである。この「危険を感じるけれども吸いよせられる」魅力は、昔話からも感じられる。本稿では、水辺の「性悪女」魅力と昔話の関連を探る。

研究の方法は、筆者の体験と、それから感じた内容を記述することである。筆者の環境認識は完全ではないことを断わっておく。間違いがあっても不思議ではない。対象地域は、風光明媚な岐阜県多治見市の水辺である。



地図-1 対象地域 0 500 m

2. 不動明王の滝の不思議な道

1994年1月16日。多治見駅からバスに乗り、小名田不動尊バス停でおりる。道路右側の山道を歩く。山道両側には時々、気味の悪い赤い旗がたつ。旗には「奉納 大聖不動明王」と書かれている。いきどまりが不動明王の滝である。水神様は滝の上方、後方にあった。

下からは、木々で囲まれ、はっきりとは見えなかった。

さて、目の病気が直る言い伝えがあるので、水で目を洗う。私は賽銭は投げなかった。言い伝えの中には、病気が直る話の他に、水神は、眺めのよい高い場所にいる話がある。滝壺におちた水神は、「わしを探し出して滝のよく見える眺めのよい場所に安置してくれ」と願う。目を患う人の一家が、手探りで探し出した。目が直った。という話だ。

私は、滝から少し後退して、道のない山の斜面を登った。水神の後ろにたどりつく。とげのある鉄線で作られていた。私のような人から、水神様を守るために、誰かがつけたのであろう。私は明王の顔を覗き込んだ。罰があたりそうなので「私は水神の一番弟子だ。」といった。水神からみた景色は、つまらなかった。木と葉が邪魔になり、滝壺もよく見えない。視線を上にも挙げて、木、葉がみえるだけであった。水神が見える景色をより正確にみたい。このようにすれば、水神にどんどん近づく。こうして背後に人がやってくるから、水神は、何度も滝壺に落ちるのかもしれない。

昔話は、人のイメージをかきたてることがわかった。帰り道、山の斜面に、斜めの道があることに気がついた。人が歩いてできた道をたどると、水神に向かっていった。訪れる人は、昔話で語られる内容を体験しようと考え。ばちあたりな行為を密かにおこない、人に黙って帰るも、もらすも楽しい。ただし水神の落下は、人の落下を意味する場合もある。性悪女にとり殺される、おそれも十分あった。

3. 多治見の虎溪山の竜浮淵

竜浮淵という名前から、深くて、おそろしい淵のイメージが浮かびあがる。実際、次のような話で始まる。「土岐川は永保寺の下で、どんと虎溪山にぶつかって、流れの向きをかえるやろ。山は絶壁で、川は渦を巻いて淵をつくつとる。あれが竜浮淵や。…」この淵付近は、昼間でも暗いほど木が茂り、岩にはこれが見え、大変危険な場所だったという。しかし一方で、嫁入り、葬式の時に、お客に出す膳碗を貸してくれるありがたい場所でもあった。話自体が、性悪女のような

私は、またも、道のない山をおりていった。1994年1

月29日。私のルートを示す。



地図-2 ルート

川沿いを歩いていくと、歩ける川辺がなくなった。左横に山が立ち塞がっている。そこで、また、小山の斜面を登っていった。小山の向こう側に、竜の棲む淵があるのかもと思う。

小山を登っておりてゆくと、コンクリートらしきトンネルがあった。そして、トンネルをぬけると、出口の山道右側付近には、さびついた鉄の手すりがあった。誰かが、計画した、しつらえ、だろう。その眼下に山とぶつかった川があった。竜は、いそうである。道の前方に向かっておそろおそろあるく。道は水でぬれていた。水たまりもあった。山道の岩盤も堅固とはおもえなかった。

道は、私をみているようだった。びんびんと自然の気配を感じた。前方に木が倒れていた。いかにも人間が木をきって、道をとざし、向かうにいくなと呼びかけるようなしつらえだった。勇気を出してのりこえ進んだ。水門らしきものをこえ、公園の裏側に出た。ほっとした。後に、永保寺庭園という有名な庭園であることを知った。すごく人間に優しい人工物と感じた。竜浮淵という名前に吸い寄せられて、自然を味わった後に、人工物の温かみを感じた。両方の落差を体験できたことが楽しかった。助かってよかった。

4. まとめ

水辺の性悪女的魅力を再認識するとともに、人間の

エネルギーも感じた。刺激を好む。そのために環境へ近づき、時には通常の宗教儀礼²とは別の行動をとる。環境の破壊もする。昔話のつくりかたによっては、想像を越えた行動を、おこす可能性も十分ある。竜や河童を捕えようと、網を投げ込む人がいることは、想像できる。

5. 今後の展望

さて、水辺の魅力は、最近の自然保護運動ともつながるだろう。自然保護運動は、驚きや感動等の、刺激を与えてくれる自然を、保全しようという運動といえないだろうか?時には、マゾも、一つの刺激だろう。自然にいじめられたい、あるいは、いじめられる人間の姿をみたいと考えるのではないだろうか。

自分のイメージとの落差を、あじわうこともある。もっと悲惨であったり、もっと人間にやさしかったりする。ところで、人間自身も、人工物も、刺激を与えてくれるはずだ。しかし、河川整備に限れば、そこから本や昔話で語られる、豊かなイメージとのくずれかたが似通っている。深くて不気味で何があるか、わからない。すごいエネルギーを秘めている。そういう印象を与えるはずの空間が、大体、「水が少ない、水が汚い」ものになっている。無表情とを感じる。無論、個人的には、感動した人工物(例えば液晶ビューカム等)もある。また、人の意見にも、母なる自然を感じることが多い。

それなのに、なぜだろうか?なぜ私は、各種の公共事業がもたらす整備に、刺激を受けないのであろうか?人間の可能性を、つぶしているものがあるように、おもえてならない。例えば、「税金のみという財源制約下で計画せねば」という通念が、そうではないだろうか?社会システムデザインのイメージが、陳腐なものになってしまう。こんなにも余剰のある社会でありながらだ。

今後の豊かな社会を考える上で、人間のイメージを刺激し、鍛えるものが重要となってくる。その中には、性悪女的自然も含まれる。そして陳腐な整備の再構築が必要と思う。

参考文献

1. マーフィーの法則,アーサー・ブロック,倉骨 彰 訳,アスキー出版局,1994
2. 文化人類学辞典,弘文堂, pp.213-214,1987